

介護福祉実習のあり方と評価

しばはらきみえ さとうよしこ えんどうのぶこ えんどうけいこ
柴原君江 佐藤芳子 遠藤信子 遠藤慶子

〈要 旨〉

介護福祉実習にあたって、福祉援助の視点である人権尊重、権利擁護、自立支援を中心に実習を展開するために学部全体の共通目標として実習の新たな視点を加えた。介護実習の評価についても客観性をもたせるために、実習施設の指導者の評価、学内担当教員の評価、各学生の反省点をふまえて評価する仕組みをつくったが、これらのことが実習にどのように反映するかについて、実習Ⅰについて分析した。全体として、施設指導者の評価は学生自身の評価を上回っていた。教員の評価は実習の現場に直接かかわっていないので、記録や実習指導の授業、実習反省会を通して総合的に判断して行っているが、評価の公平性や精度をさらに高める必要がある。

〈キーワード〉

介護福祉実習, 実習Ⅰ, 実習目標, 評価

1. はじめに

当大学は、平成14年度に短期大学から4年制大学に改組し、福祉専門の大学をめざして新たに発足した。介護福祉専攻の学生は、2年間の教育課程で資格取得が可能であるが、4年間のコースにしたことによって、ゆとりある福祉教育を行うとともに、基礎的教養を高め、さらに介護福祉士の国家資格と社会福祉士の国家試験受験資格を得ることが可能になる。介護福祉士専攻の学生のうち約8割は社会福祉士国家試験の受験資格を得ることを希望して学んでいる。したがって、介護教育のあり方を介護福祉及び社会福祉援助者として新たな視点でとらえ直す必要があった。特に、介護福祉実習は要介護者へ日常のサービス中心の働きかけであるために、介護の技術的な面が教育の中心課題になる。学内の演習が、施設における現場の実習において、個別の対象への援助がどれだけ具体的に展開できるかが問題となる。

社会福祉士の課程を同時に学ぶ学生にとっては、介護福祉に必要な専門的理論、知識、

技術を超えた相談援助やケースワーク、チームワークの方法を課題とする必要がある。当然ながら社会福祉援助実習における課題も立案し実習に望むことになるが、介護との役割分担や関連性・連携について把握しなければならない。

施設実習計画にあたってこれらの点を考慮し、現場実習のありかたや実習教育について考察し、さらに実習評価についてまとめたので報告する。

2. 研究方法

介護福祉専攻の学生の実習計画は別立てに行われていたが、学部全体としての福祉教育の観点から、14年度から実習オリエンテーションを学部の共通事項として計画している。また、「実習の手引き」においても、福祉援助の視点として人権尊重、権利擁護、自立支援を中心に実習を展開するために、共通目標とし実習の新たな視点を加えた。

実習の評価についても客観性をもたせるために、実習施設の指導者の評価、学内担当教員の評価、各学生の反省点をふまえて評価する仕組みをつくったが、これらのことが実習にどのように反映するかについて分析を試みた。

対象は田園調布学園大学1回生48名の実習Iの状況を教員の指導記録、学生の自己評価及び施設実習評価表を中心に分析した。

分析方法は、施設指導者の実習評価と学生の自己評価の差、教員の実習指導上における学生の指導上の問題をあわせて学生の特性を明らかにした。

3. 実習の意義・目標の見直し

当大学では、各コース・専攻ごとに社会福祉実習、精神保健実習、介護福祉実習が行われる。これらは「社会福祉士」、「精神保健福祉士」の国家試験受験資格、介護福祉専攻は介護福祉士の国家資格取得のために指定されている。援助対象者の生活上の問題を把握し、問題解決過程にそった現場実習を体験する。現場実習は福祉援助者としての実践能力を養う上で重要である。そこで、学部における現場実習の到達目標を「実習の手引き」に以下のように明記した。

「学内での実習や演習から得られた知識や技術は、援助の対象となる人とその生活から起こってくるニーズへの対応、つまり問題解決実践と統合してはじめて身につくものである。理論と実践は互いに規制しあう部分はあるが、活動の方向付けと内容の実質化をはかっているかなければならない。実習施設はその場の条件の中での実際的な活動が要求される。同時に理論や原理に基づいた正確な、合理的な実践が要求される。この両者の関連を念頭において実習をする。そのことによって実習の場でしか得ることのできない援助の対象者との出会いによる対象の理解、そこで仕事をしている各専門職から得られる福祉の理

念、価値、倫理の共有によって、自らの福祉観を高めていくことができるのである。」

実習における自己の到達目標を明確にし、実習目標を設定した。

- (1) 学内で学んだ知識・技術に基づいて施設等の利用者と人間のかかわりを深め、求められている福祉援助への理解・判断力を養う。
- (2) 社会福祉実践における対人サービス体験を通して、周辺から支えられる物的条件である設備・装置、福祉用具、生活用具などの特徴、機能に関する認識を幅広く持ち、駆使する能力を身につける。
- (3) 援助計画のたてかたや記録について学び専門職としての自己覚知を深める。
- (4) 実習を通して社会福祉援助者として、また人間として成長していくことを目標とする。

4. 実習指導の拠点

実習の場で何をどのように学んでいくかについては、施設に配属されて実習を行う前後に学内授業で事前学習、事後の学習で明らかにする。事前学習では講義や演習で学んだ知識や技術の再確認し、実習の目標を自分のものとして具体的にしなければならない。実習オリエンテーションや実習指導、技術演習を通して自己の実習到達目標を明確にしておく。実習後は現場の経験を基に教員や仲間と報告しあいながら、互いに学ぶべき課題を明らかにして次の実習に結びつける。

実習に関する学生指導や事務的作業の拠点を情報実習センターにおき、全学生のサポート体制を整備した。学生が実習施設の情報を自ら調べられるように、施設の概要など資料の整備がされている。実習センターには助手及び事務職員が常時学生の指導に当たれるように、学部全体の実習の環境を整えた。

5. 介護福祉実習の意義と目的

介護福祉士の業務は、日常生活支援の実践的性格をもっているため、理論学習や演習による応用思考の習得とともに、専門的知識や技術を体験、つまり現場で体得し実行していく能力を身につけていく必要がある。介護福祉実習は、生活の主体者である個人の生活問題や支援ニーズを持つ人々に対して、学生がこれまで学習した専門的知識を総合的に駆使して、問題解決をはかる体験学習である。

介護福祉は実践の科学であり、介護福祉技術を現場で体験して学ぶことの意義を大きくとりあげ、就職後は即戦力が期待されるのである。時には、学生も現場の介護の力として手助けすることも必要であり、それだけに実習の場で利用者の一人ひとりを理解し、介護技術力を高めるために真剣に学ばなければならない。

実習の手引き¹⁾には実習の意義と目的として以下のことを記載した。

「実習を受入れてくれる施設や機関は、利用者の生活の場であり援助する専門職の働く場である。日常の生活が営まれ介護が展開されている。場の特性や支援の仕方の個別性がある。学内で学ぶことが出来ない新しい体験もある。これらの特色ある現場の体験を通して様々な角度から学び、分析し、考察を加えることによって自らを向上させる努力が大切である」

実践の場でないと養われないものを、どれだけ自己の実習目標の中にこめて実践していくかということは、実習の目標として文字で記載されたもの以上に重みのあることである。

(1) 実習における到達目標

- 1) 実習Ⅰは、はじめての実習であり、その目標は入所施設における介護福祉援助の実践の基礎を身につけるために、施設の機能や設備、職員が行う業務内容について理解する。利用者とのコミュニケーションを通して利用者を理解し、援助のための基本的信頼関係を形成する。さらに日常生活援助としての介護技術の見学、指導を受けながら体験する。そのことによって利用者が求めているニーズに関する理解力・判断力を養う。
- 2) 実習Ⅱは第Ⅰ段階で学んだことを基礎に、実際に利用者への援助を行う。学内で学んだ介護援助の具体的実践、すなわち、利用者の身体的・精神的レベルを理解しコミュニケーションを含む日常の基礎的介護を安全・安楽、かつ自立への配慮をしながら実践することを目標とする。また業務記録やケース記録について内容を理解し、書き方の要点を学ぶ。また介護と関わりのある職員とその役割について理解し、チームを組むための心構えを学ぶ。さらに、第Ⅲ段階の実習にむけて、施設全体の理解を深める。すなわち、生活の場としての施設、地域の福祉サービスの拠点としての施設が、生活の質を保証するためにどのように取り組んでいるのか、地域の中であってどのようなサービスが必要とされ、サービス内容をどれだけ準備し、活用されているか、これらを実現するために介護福祉士がどのような役割を担い、どのように専門性を生かすのかを検討する。
- 3) 実習Ⅲは実習の最終段階であり、個別の介護問題解決の方法、介護過程にそって介護援助を実施（展開）し、介護福祉士としての総合的な援助が実施できるようになることを目標とする。

利用者個人に焦点をあて、個人の問題を考察することから、家族の問題、地域の問題、社会福祉全体の問題が見えてくるような実習をめざす事が重要である。そして実際に解決すべき問題が明確になれば、どのように援助技術を習得し、ケアプランを立案し、実施に導くかを実践し評価する。個々の利用者が、集団の中でもその人らしさを保てる援助がいかに提供できるかという、学生自身の専門職（介護福祉士）としての介護観を

1) 田園調布学園大学人間福祉学部「介護実習・実習の手引き」p.7, 2003。

明確にすることの目標にもなる。

(2) 実習のスケジュール

介護福祉実習においては、介護福祉士の国家資格取得のために10週間の現場における実習が規定されている。同時に社会福祉士の国家試験受験資格を取得するためにはさらに4週間の現場実習が課せられる。学内全体の実習スケジュールの組み合わせを考慮して介護福祉専攻コースの実習期間を設定した。実習月に関しては、受け入れ施設の条件があるため多少の前後はあるが以下の表1の通りである。

表1 年次ごとの実習スケジュール

| 年次 月 資格 | 2年次 8～9月 | 2年次 2～3月 | 3年次 5～8月 | 3年次 8～9月 | 3年次 2～3月 | 4年次 8～9月 |
|-----------------|----------------|----------------|-------------|----------------|------------------|------------------|
| 介護福祉士 | 介護実習Ⅰ (2週間) | 介護実習Ⅱ (2週間) | 訪問介護実習(2日間) | 介護実習Ⅲ (3週間) | | |
| 介護福祉士 +社会福祉士 | 介護実習Ⅰ (2週間) | 介護実習Ⅱ (2週間) | 訪問介護実習(2日間) | 介護実習Ⅲ (3週間) | 社会福祉実習Ⅰ (2週間) | 社会福祉実習Ⅱ (2週間) |

(3) 実習要件の明確化

実習は科目履修と違って施設の利用者や職員と直接的なかかわりをもつ中での学習なので、基礎的な知識や技術とともに積極的に学ぶ姿勢と利用者のニーズにそった援助が要求される。実習開始にあたって必要な学習がされていること、オリエンテーションに出席し実習準備もきちんとされていなければならない。オリエンテーションに関しては、学部全体として実習に向かう積極的な姿勢をつくり、守らなければならないルールを確認させる。つまり、遅刻、欠席をしてはならないことや、アクシデントの場合の速やかな連絡方法、実習準備の具体的なこと、連絡・挨拶にいたる細部の指導を実施している。

さらにそれぞれの学生が自己の学ぶ目標をどれだけ具体的にできるか、準備が十分でな

表2 実習要件(終了すべきことが満たされていること)

| 実習 | 時期 | 終了すべきこと |
|----------|---------|---|
| 介護福祉実習Ⅰ | 2年次8～9月 | 介護概論(1年次)単位取得, 介護技術テスト合格。必要な健康診断・検査を受けていること |
| 介護福祉実習Ⅱ | 2年次2～3月 | 介護実習Ⅰをクリアしていること。2年次前期までの指定科目のすべてを単位取得。健康診断・必要な検査を受けていること |
| 介護福祉実習Ⅲ | 3年次8～9月 | 介護実習Ⅰ・Ⅱをクリアしていること。2年次後期までの指定科目のすべてを単位取得 |
| 在宅訪問介護実習 | 3年次5～8月 | 介護実習Ⅰ・Ⅱをクリアしていること。2年次後期までの指定科目のすべてを単位取得 |
| 社会福祉実習Ⅰ | 3年次2～3月 | 社会福祉各必修科目の3分の2以上の出席。実習関係の提出物がすべて出ていること。共通オリエンテーションにすべて出席。健康診断・必要な検査を受けていること |
| 社会福祉実習Ⅱ | 4年次8～9月 | 社会福祉実習Ⅰがクリアされていること。社会福祉各必修科目の3分の2以上の出席 |

いまま実習を開始すると利用者や施設職員に迷惑になる。それらをふくめて実習要件を明記し実習への動機づけとするとともに、条件が満たされない時は実習停止、または延期とする内容を明らかにした。実習要件は表2に記載した通りである。

(4) 実習上の留意点

1) 実習の中で大切にしたいことは、何よりも学ぶ姿勢である。自分から関わっていかうとすることが大切で、緊張や戸惑いが多い中ではあるが、人と関わることの大切さを学ぶ。施設の援助の実際は、施設や利用者の条件の中で選択して実践していることなので、学ぶ立場で批判する態度はさげなければならない。

2) 積極的な実習

多くの学生および実習受け入れ側とともに「積極的な態度」や「積極的な実習」を期待する表現をすることが多い。しかし、多くの利用者と目的もなく「お話する」、職員に「何でも質問する」といったことが積極的なのか。「利用者と職員」「利用者同士の関係」「職員間のやりとり」などを観察することや傾聴することも重要な積極的な実習の態度である。具体的な援助・介護業務を中心とした「行動する」=(見学する)(実践してみる)実習も重要である。

3) 自分自身を見つめ直す機会とする

自分の感情や印象を重要視する。介護の現場で、利用者や職員とかわりながら、自分の感情の変化や気持ちが揺れ動くことを体験し、自己分析することも学習である。自分がどんな場面でどのような感情を抱いたのか、嬉しかったことや、役に立ったというような肯定的なもの、反対に失敗した、うまくいかなかった、悲しかった、こんなはずではなかったなどの否定的感情について分析し、ふりかえってみる事から人間形成の一助とすることができる。

4) わかった事・できた事、わからないこと・できなかったことの確認

- ・わかったことは本当にそうなのか
- ・わからなかったことは何か・どう解決すれば良いか
- ・できないと思っていたことの中で、自分のできる部分を見つける
- ・できると思っていたことの中の、自分のできない部分を見つける。

これらを繰り返し行っていく事で、自己の学習課題が明確になり、目標としていくことにつながる。

6. 実習の手引きの活用

実習の手引きは、学生の実習オリエンテーションのためのテキストでもあり、学生が常時活用できるように実習上のすべてが網羅されて記載されている。さらに施設指導者へ配布し、学生の実習を理解して、指導上活用していただくための資料でもある。活用するす

べての人に見合った資料をこの1冊にこめることは作成上困難ではあるが、主たる目的は学生の実習上の手引きである。

4年制大学に改組したといっても「介護福祉士養成等における授業科目の目標及び内容」が変更したわけでもなく、実習施設の条件も変化したわけでもない。しかし、大学として従来に増してより確実な学習指導、全学部としての取り組みのために指導のありかたを検討し、新たに「実習の手引き」を作成した。

(1) 実習手引きの改善点および追加項目

- 1) 社会福祉実習と介護福祉実習の基本的理念
- 2) 実習要件と年次ごとの実習スケジュール
- 3) 実習 I, II, IIIにおける援助の実際（一覧表）
- 4) 緊急時の対応
- 5) 評価の方法
- 6) 実習記録の例

(2) 実習指導の授業

実習指導に関しては、介護福祉専攻のカリキュラムにおいて以下のように設定されている。

2年次「実習指導Ⅰ」、「実習指導Ⅱ」

3年次「実習指導Ⅲ」

2年次前期 「実習指導Ⅰ」：実習Ⅰの準備、実習目標の設定、配属された実習施設の情報収集、個人票作成、実習Ⅰの実施。

2年次後期 「実習指導Ⅱ」：実習Ⅰ終了後、グループ毎に実習のまとめ・発表。
実習Ⅱの準備、実習目標の設定、配属された実習施設の情報収集、個人票作成、実習Ⅱの実施。

3年次前期 「実習指導Ⅲ」：実習Ⅱの反省、グループ毎に実習のまとめ・発表。
実習Ⅲの準備、実習目標の設定、配属された実習施設の情報収集、個人票作成、実習Ⅲの実施。

3年次後期 「実習指導Ⅲ」：実習Ⅲの反省、グループ毎に実習のまとめ・発表。

(3) 実習評価の考え方

実習における評価は総合的な科目の成績評価ともいえるべきものであり、介護福祉士としての適性を評価するものでもある。実習の段階ごとに定めてある実習目標を達成するための方法や取り組みかたを通して到達目標を設定し、評価する。

施設実習の形態は、1段階から3段階の施設実習と在宅介護実習があり、それぞれの施設や機関の特徴、利用者の健康問題や生活問題、援助のありかたを学ぶ。その評価方法は実習施設で直接指導にあたる施設の介護職員と、大学の指導担当の教員と複数の視点で評価する。また、学生が自ら実習目標の到達状況を評価し、自己の援助過程を反省・覚知し

ていく過程（自己評価）も参考にする。

- ①第1段階の実習では実習施設の概要、事業内容の把握などオリエンテーションを通して理解する。まず、第一段階では実習に対する基本的姿勢・態度を重視する。さらに利用者の理解、食事や、入浴・保清、排せつへの援助にあたって安全・安楽への配慮がされているか、生活環境を整える援助の基本を理解しているか、適切な記録がされているか、提出状況が規定通りにされているかについて評価する。
- ②第2段階での実習では実習に対する基本的姿勢は勿論であるが、施設における職種と職務内容、職種間の連携の重要性を理解する。利用者への対応もニーズを把握し援助計画のための情報収集、生活援助技術を通して利用者個々にあった介助がされること、特に移動への援助として体位交換、車椅子への移乗への援助ができたか、さらに行事やレクリエーションでの適切な援助ができたかについて評価する。
- ③第3段階での実習は介護福祉士としての適性が問われる実習である。4週間を通して一人の利用者を中心にして個別の介護問題解決過程にそって援助をする学習を行う。即ち、情報収集、アセスメント、援助計画、実施の一連の過程に添って援助することによって利用者のQOLの向上に役立つ介護のあり方を考察する。さらに今後の介護活動のあり方をどのように考えたかについて評価する。
- ④在宅介護実習は主として見学実習である。利用者の生活理解と、生活環境の把握、介護援助の必要性を訪問介護の実際場面からどのように把握したか評価する。また、利用者の居住地域の特性、援助システムの把握、今後の在宅支援の展望など記録の適切性と実習態度等から評価する。

(4) 実習評価の方法

1) 自己評価

実習の段階別課題にそって、なにをどこまで学習できたか、学習によって何を得たかについて自己の到達状況をふりかえってみる。援助技術として「できた」、「できなかった」という結果でなく、利用者の自立支援としての援助の評価や援助者としての自己覚知を重視する。評価にあたっては学習計画が具体的でなければならない。結果を次の実習計画に反映させる努力が必要である。

2) 施設指導者の評価

施設における評価は、大学の評価表に基づいて施設の指導者に記載を依頼する。記載にあたっては実習打合せ会で説明・周知すると共に、実習中に教員の巡回指導時にも記載内容に関して連絡調整をする。

3) 評価基準

実習内容評価表は、基本的姿勢、実習施設の理解、利用者の理解、利用者への対応、記録、集団活動への参加、個別援助の展開、食事の援助、入浴・清潔・整容の援助、排泄への援助、移動への援助、生活環境の援助の12項目をA～D段階で評価する。各項目は58項

目に細分化されているので、評価点の参考にする。

教員は、施設実習指導者の評価表を参考にして、実習巡回中の実習のとりくみかたや実習記録から評価し、単位認定をする。評価基準はS, A, B, C, Dとし、C以上を合格点とする。

(4) 実習における事故及び感染症への対応

1) 実習前に確認しておくこと

- ①ツベルクリン、BCGの最終年月日、結果の確認。
- ②入学後、健康診断におけるレントゲン検査の実施の有無と結果。
- ③学生自身が下痢や嘔吐、発熱、発疹、湿疹などの皮膚疾患、眼脂、眼のかすみ、充血があった時は直ちに指導教員に報告すること。

2) 実習中に感染症のある利用者と接した場合

- ①接触状況を直ちに施設の実習指導者および指導担当教員（または情報・実習センター）に報告し、指示を待つこと。
- ②実習中に学生自身が下痢や嘔吐、発熱、発疹、湿疹などの皮膚疾患、眼脂、眼のかすみ、充血等があった場合は指導担当教員に報告し、指示を待つこと。
- ③医師の診断・処置が必要と判断された場合は指導教員から学生へ連絡する。医療や休養が必要な場合は指導教員の指示にそって行動すること。受診した場合は医療の状況を指導教員に報告すること。

3) 実習中に以下の事故が発生した場合、速やかに施設の実習指導者および指導教員（または情報・実習センター）に報告する。

- ①学生が利用者等に害を与えた場合
- ②学生が利用者等から危害を受けた場合
- ③学生が利用者等の金品の紛失・破損に関係した場合
- ④実習施設の設備、備品等の破損・紛失に関係した場合
- ⑤実習施設に感染症が発生し、学生に罹患の疑いがある場合
- ⑥学生が感染症に罹患した場合
- ⑦実習施設の行き帰りに事故（自己の損傷、他への危害）が生じた場合

7. 介護実習の展開と実習Ⅰの評価の実際

(1) 実習巡回指導

実習中の学生指導は、施設への巡回によって行なわれる。巡回指導は学生との面接によって実習状況を把握し、施設指導者から学生の実習状況について情報得ることになる。学生が介護している実際場面を見ることができないので、学生の報告や記録から判断する。実際の介護場面は利用者のプライバシー保護の立場、教員が現場に入り込むことの迷惑感

実習巡回指導記録用紙

| 実習巡回記録 | | | | 実習における学習状況 |
|--|---------|-----------|-----|--|
| 学籍番号 | 氏名 | 実習：介護実習 I | | |
| 実習施設名 | | 実習期間 | | 1. 学習への意欲や取り組みかた 2. 実習体験の整理と活かし方 (日々整理し、実習に活かしているか) 3. 段階としての目標に対する達成度 4. 個人の目標に対する達成度 5. その他 |
| | 巡回日・帰校日 | 施設面接者 | 巡回者 | |
| 1回目 | | | | |
| 2回目 | | | | |
| 3回目 | | | | |
| 4回目 | | | | |
| 1. 学生の様子（体調，実習態度）訴え等 2. 実習指導者から 3. その他（施設からの連絡，要望など） | | | | |

から遠慮しなければならない実態がある。従って、学生と面接室で話し合いながら実習巡回記録用紙にメモをとることにしている。

実習巡回指導は、帰校日の指導を含めて1施設、週2回の割合で行なわれている。学生と面接した結果と施設指導者から得た学生の実習状況から問題の有無を判断して記録する。

実習 I に関して、巡回記録に記載された内容はおおよそ次の通りであった。

1) 巡回記録－1

①学生の様子（体調，実習態度）訴え等

- ・緊張した様子はなく意欲的に取り組んでいる。
- ・スタッフの発言に落ち込んだ様子がみられる。
- ・メモもとらず、話を聞く態度の悪さを施設指導者に指摘された。
- ・指導を受ける態度が悪く、言葉使いを注意された。自分は一生懸命やっているが態度に反映されてないようだ。
- ・小指の打撲骨折，しかし実習は継続している。
- ・気難しい利用者との関わり方が評価され，実習に積極的になった。
- ・実習施設への通所が遠く，体調不良を訴える。疲労すると蕁麻疹がでることを気にしている。
- ・積極的に実習しているが，指導者のアドバイスにきちんと応えていない。

- ・実習の初期はどうしてよいかわからず疲労が大きかったが、次第に落ち着いてきた。
- ・元気に取り組んでいるが、目の前のことで精一杯、予定を忘れて落ち込んでいる。
- ・記録が書けない、基本的なことができなくて注意される。
- ・はじめての実習で不安、場所に慣れることから始める。利用者とのどのように接してよいかわからない様子であったが、次第になれて安定。敬語と親しさの表現の使い分けに悩んでいる。
- ・何をしてもよいかわからず、指導者も忙しそうで聞くことができない。学ぶ意欲はある。次第に慣れてはきたが、迷惑にならないか心配している。
- ・記録を書くのが難しく、時間がかかる。
- ・積極的に取り組んでいる。言葉使いに注意を受ける。
- ・落ち着きがなく緊張している。失敗を恐れて気負っている。
- ・体調不良（風邪、発熱）で休養。
- ・精神的に不安定。クラスメートに支えられて次第に落ち着く。
- ・腰痛、精神的緊張で「疲れる」と訴えるが次第に落ち着く。

②実習指導者から

- ・はじめての実習に対する準備、学習が不足している。何を課題にしているのか具体性に欠ける。表現力が乏しい。
- ・実習に対するレディネスが不十分なので課題を与えた。何をしたらいいか、学生が自ら積極的に見つけて実習をしてほしい。
- ・利用者の理解の仕方がずれていること反省。よい点に気づいたことを評価された。
- ・やや消極的、声が小さい、学生らしく遠慮なく質問してほしい。
- ・基本的な介護技術、麻痺への配慮、車椅子の操作などがわかっていない。
- ・記録の誤字、脱字が多い。話し言葉の表現を注意。専門用語を使うこと。
- ・記録は事実を書くだけで、考察ができない。
- ・次第に笑顔が見られ落ち着いて実習している。
- ・積極的に実習しているが、見学中心で手が出ない。態度はやさしく好感がもてる。
- ・基本的姿勢、観察、笑顔を絶やさない態度など高く評価された。
- ・老人保健施設の特徴、医療と介護の連携を学んでほしい。

③その他（施設からの連絡、要望など）

- ・実習は3週間のため、やっと状況がわかったところで終わってしまうので、この後も時間がある時に施設に来て利用者と接してほしい。
- ・疥癬の発症あり、実習着など持ち出せないため、洗濯を施設内で行なった。学生は直接接しないように配慮した。
- ・実習中はアクセサリをはずすこと。

- ・言葉使いが悪い。
- ・次年度は新人研修で、実習生を受け入れにくい状況。
- ・施設長より、職員の勉強になるので学生実習の受入れは好意的
- ・指導者の転勤で、十分な指導が出来ないことわりがあった。

2) 巡回記録－2 (学習状況)

①学習への意欲や取り組み方

- ・職員によく質問をして疑問を解決している。
- ・真面目に取り組む姿勢がみられる。努力をしている。
- ・実習目標達成の満足感がみられた。コミュニケーションの難しい利用者に意欲的に取り組んだ。
- ・利用者を理解することに意欲的に取り組む。実習が楽しくゆとりをもって実習。
- ・日々の取り組みに精一杯、積極的な関わりをした。
- ・こまやかな気配り、気づきがみられた。
- ・技術に気をとられ、コミュニケーション不足。
- ・意欲は高いが自分の思いとの差に不満や批判が出やすい。
- ・努力はしているようだが「疲れた」という言葉が多い
- ・基本的学習不足。自ら調べないで質問をする。事前学習、基礎知識不足、自覚が足りない。
- ・積極的で、自信過剰、注意しても効果がみられない。
- ・重症心身障害児施設で特殊対応であり、手探り状態であった。
- ・自分の意見を言うことが少ない。
- ・何のための援助か理解しないで技術を使うことに終始している。
- ・身体介護がないことに戸惑いがみられる。
- ・何をしていたかわからない。利用者の名前も覚えられないなど戸惑いが見られる。
- ・積極性がない。指導者に言われたことしかやらない。
- ・情緒的で、気分によって左右される。空回りで進歩が見られない。

②実習体験の整理と活かし方 (日々整理し、翌日の実習に活かしているか)

- ・1週目の課題を次に生かす工夫がされている。
- ・反省会でも自分の言葉で表現し、考察している。記録もしっかり書けている。
- ・よくメモをとり、内容を確認して記録している。
- ・毎日の反省をしながら次の課題に取り組む工夫、積み重ねがされていた。
- ・感染症の問題があったとき、資料を確認、体験を整理し活かしていた。
- ・記録の表現は未熟だが、毎日の整理、積み重ねがある。
- ・感じたことを素直に表現している。少しずつ学んだことを身につけている。
- ・1つの場面、1体験ごとに考え話し合い、次のステップにつなげることが出来た。

- ・先輩の指導で学んだことの振り返りができるようになった。
- ・事実の記述はできているが、自分の考えが表現されてない。
- ・記録は感想のレベルで、深まりがない。記録の誤字、脱字
- ・多く記録されていたが、整理してポイントをはっきりさせる工夫が必要。
- ・1日の援助目標を振り返り、結果の分析をすることができてない。
- ・経験したことの意味、理由を考えることはできたが、表面的であった。
- ・記録に時間がかかり苦勞している。状況の羅列で整理ができない。

③段階としての目標に対する達成度

- ・当初施設になじめなかったが、次第に落ち着いて目標に到達することができた。
- ・目標、課題を忘れていた。三週目に入ってようやく理解できた。
- ・施設の現状を見聞きし、体験したことにより目標に達成したと思われる。
- ・よく努力して、利用者の生活のペースを把握。自己学習がきちんとされていた。
- ・利用者の自由な動きを理解できず固執していたが、目標の達成はほぼ出来た。
- ・マイペースであることが学習によい影響を与えなかった。指導されたことを聞く訓練が必要。
- ・利用者の個別の特性に対する関心や注意を払うことに欠けている。
- ・生活状況を知るレベルで終始した。実践を通して自己の振り返りが必要。

④個人の目標に対する達成度

- ・ほぼ達成している。
- ・言葉使いに悩んでいたが、後半から利用者とのコミュニケーションがとれるようになった。
- ・観察の必要性をきちんと認識していた。
- ・日常の学習がきちんとされているので、目標の達成度が高い。
- ・毎日のケアに取り組むのが精一杯で深く考えることができない。記録に残せない。
- ・基本的な知識、技術の学習し直しが必要。
- ・謙虚さの欠如が目標の達成に悪影響を与えている。
- ・技術援助への満足感が高く、実習Ⅰの目標を忘れていた。

(2) 実習終了後の学生の反省

実習終了後は、実習指導Ⅰの授業の中で学んだことの整理と各学生が学んだことや反省などをグループごとに話し合っている。さらにクラス全体で報告会を行い、気づいたことを共有している。

実習のまとめは各自、自由に話し合い学んだことを整理しているが、話し合いの焦点を絞るために「実習のまとめ用紙」に以下の項目を設定し、話し合いの材料にしている。

「実習のまとめ」には以下の内容が記載されていた。

- ①施設のオリエンテーションをどのように受け止めましたか。実習に役立てたことをま

実習1のまとめ用紙

| 介護実習1のまとめ | 報告会は以下の項目にそって行ってください |
|--|----------------------|
| 学籍番号 | 氏名 |
| 1. 施設のオリエンテーションをどのように受け止めましたか。 実習に役立てたことをまとめてください | |
| 2. 基礎的な介護技術を習得することができましたか。できたこと、できなかったが勉強になったことなどをまとめてください。 | |
| 3. 自分の実習課題を達成することができましたか。どのようにできたか、できなかったことは何かを具体的にまとめてください。 | |
| 4. 施設の職員さんからどんなことを学びましたか。印象に残ったことを具体的にまとめてください。 | |
| 5. 実習中に失敗したこと、利用者さんへの援助でヒヤッとしたことなどがあったら書いてください。 | |
| 6. 実習全体を振り返って、その意義、次の実習や自己の学習に生かしたいこと、疑問点などをまとめてください。 | |

とめてください。

- ・前もって施設の状況を調べておいたので理解しやすかった。
 - ・オリエンテーションを受けたことから、実際にフロアーに立ったときに施設設備やその機能が理解できた。また、利用者に接するなかから注意を受けたことなどが実感できた。
 - ・業務の流れ、利用者に接する時の心構えを伺って実習の緊張感が緩和した。
 - ・利用者の状況理解、観察、援助の基本を伺い実習に役立てることができた。
 - ・地域に開かれた施設であること、家族会との連携、ボランティアの受け入れ、施設の雰囲気などが理解できた。
 - ・学生の実習目標をひとつひとつ質問されたことから明確になった。
- ②基礎的な介護技術を習得することができましたか。できたこと、できなかったが勉強になったことなどをまとめてください。
- ・入浴介護は見学、食事介助、排泄介護、トランス、車椅子介助は実施した。
 - ・介護をしながら利用者のペースを理解した。

- ・様々な障害の方の援助を体験，利用者にあった方法を理解した。
- ③自分の実習課題を達成することができましたか。どのようにできたか，できなかったことは何かを具体的にまとめてください。
- ・観察の重要性。利用者に対する態度，言葉使いはさらに学ぶ必要がある。
 - ・個々の利用者の名前，特徴など覚えることができた。職員に指示されたことを行い積極的行動といえなかった。
 - ・コミュニケーションが思うようにはいかなかった。寝たきりの利用者に近づきにくかった。非言語部分を大切にしていたが言語にとらわれすぎた。
- ④施設の職員さんからどんなことを学びましたか。印象に残ったことを具体的にまとめてください。
- ・学生が学びやすい配慮があつて，利用者には迷惑にならない行動をしていた。
 - ・利用者から学べと言われたこと。
 - ・聞き上手になるように言われたこと。
- ⑤実習中に失敗したこと，利用者さんへの援助でヒヤッとしたことなどがあつたら書いてください。
- ・オムツ交換時に負担をかけてしまった。
 - ・手を離れたら車椅子からすべってしまった。
 - ・食事介助で喉につまらせた。背中を叩いたら治まった。
 - ・排泄介助で利用者が不安定になった。
 - ・トイレ介助でカーテンを閉めたら，中で利用者が倒れた。
 - ・説明不足で利用者を怒らせてしまった。
- ⑥実習全体を振り返って，その意義，次の実習や自己の学習に生かしたいこと，疑問点などをまとめてください。
- ・学内で学んだことが身にしみて理解できた。他の施設の介護実態を聞いて学ぶことが多かった。
 - ・現場に直面すると試行錯誤になった。教科書通りでないことがわかった。

(3) 実習Ⅰ段階における評価の実際

実習評価は実習Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ毎に評価表に沿って施設の指導者に依頼している。評価基準はあるが，その判断は施設の各指導者にまかされているので判断の差があることは否定できない。つまり，厳しい評価，比較的甘い評価があることを踏まえて教員が実習単位の認定を行わなければならない。単位認定は施設指導者の評価表，実習記録，実習指導の科目で行う実習の準備・計画，実習終了後のまとめと課題発表等を総合して評価する。また，学生自身が実習の結果をどのように評価するかを参考にするため，同じ評価表で自己評価をさせている。学生41人の実習Ⅰの自己評価について指導者の評価との一致状況をみたところ以下の通りであった。評価内容はa～kの11項目である。

1) 介護実習第1段階, 実習内容評価表の評価項目

以下の各項目をA, B, C, Dで評価する。

- A:よくできた (80点以上)
- B:できている (79~70点)
- C:努力を要する (69~60点)
- D:できてない (59点以下) 不合格

a. 基本的姿勢

- ・言葉使い, 礼儀, 身だしなみは良好であった。
- ・身体的にも精神的にも自己の健康管理に留意して安定していた。
- ・目標を意識して積極的に実習に取り組んだ。
- ・指導や助言を理解し, 協調的態度で行動した。
- ・介護職の役割や重要性を学ぶ姿勢があった。
- ・記録物(日誌等)の提出の時間が守られていた。

b. 実習施設の理解

- ・施設の概要や事業内容が理解できていた。

c. 利用者の理解

- ・利用者の心身の状態が理解でき, 状態変化が観察できていた。
- ・利用者の身体的・精神的ニーズが把握できていた。

d. 利用者への対応

- ・利用者を尊重し, 適切な態度や話し方ができていた。
- ・利用者との良好な関係ができていた。
- ・利用者のプライバシーへの配慮ができていた。

e. 記録

- ・各種記録の重要性と内容の理解ができていた。
- ・実習日誌が誤字・脱字なく, わかりやすく文章が書けていた。
- ・実習内容が適切に記録できていた。

f. 集団活動への参加

- ・行事・レクリエーション等の目的を理解し, 積極的に参加できていた。

g. 食事の援助

- ・食事時の環境準備及び後始末ができた。
- ・利用者個々の食事内容が理解でき, 適切な配膳ができた。
- ・誤嚥・火傷等に対する安全確保に配慮した。
- ・一部介助者への食事介助ができた。
- ・障害に応じた適切な援助ができた。
- ・食事摂取量や水分摂取量の把握ができた。

- ・楽しい雰囲気ですぐに食事介助ができた。
- ・食後の口腔清潔援助ができた。
- h. 入浴・清潔・整容の援助
 - ・入浴の準備・後始末ができた。
 - ・入浴者個々の状況に応じた着脱・入浴後の援助が適切だった。
 - ・入浴時の安全確保ができた。
 - ・プライバシーに関する配慮ができた。
 - ・心身の健康状態の適切な観察ができた。
 - ・清拭・足浴等の必要性が理解でき、援助ができた。
 - ・整容・身だしなみへの援助ができた。
- i. 排泄への援助
 - ・利用者個々の排泄介助の手順や環境に対する理解ができた。
 - ・排泄用具・用品の使用に関する理解ができ、実際に援助ができた。
 - ・利用者のプライバシーを守り、心理的負担を与えないような援助ができた。
 - ・排泄物の観察・報告・記録ができた。
- j. 移動への援助
 - ・移動・移乗時の安全確保、および安楽の配慮ができた。
 - ・車椅子、移動補助具の理解と取扱いができた。
- k. 生活環境の援助
 - ・居室・食堂・ホール等の環境整備について理解ができた。
 - ・利用者個々の生活環境に対する好み理解ができた。
 - ・ベッドメイキングの技術ができた。
 - ・感染予防について理解し実践できた。
 - ・シーツ・衣類等の清潔（洗濯）について理解ができた。

2) 学生の自己評価と施設指導者の評価との差

①学生と施設指導者の評価がほぼ一致している項目は、f. 集団活動への参加（行事・レクリエーションの理解と積極的参加）が最も多く、次いでb. 実習施設の理解（施

学生と指導者の評価項目の一致状況

n = 41

| 評価項目 | 総数 | 基本姿勢 | 施設理解 | 利用者の理解 | 利用者への対応 | 記録 | 集団活動参加 | 食事の援助 | 入浴清潔援助 | 排泄への援助 | 移動への援助 | 生活環境援助 |
|-----------|-----|------|------|--------|---------|----|--------|-------|--------|--------|--------|--------|
| 総数 | 451 | 41 | 41 | 41 | 41 | 41 | 41 | 41 | 41 | 41 | 41 | 41 |
| 評価が一致 | 96 | 8 | 19 | 8 | 6 | 3 | 22 | 4 | 7 | 4 | 11 | 4 |
| 学生の評価が高い | 110 | 11 | 7 | 8 | 13 | 9 | 7 | 14 | 10 | 12 | 7 | 12 |
| 指導者の評価が高い | 241 | 22 | 15 | 24 | 22 | 29 | 12 | 23 | 21 | 25 | 23 | 25 |
| 未記入（未経験） | 4 | | | 1 | | | | | 3 | | | |

設の概要や事業内容の理解)で、46%~54%の一致率であった。

- ②学生の自己評価より指導者の評価のほうが高かった項目は、e.の記録で、70.7%の学生が低い評価をしている。記録に関しては指導者もかなり低い評価をしているが、学生はそれ以上にできなかったことを認めている結果であった。次いでi.排泄への援助、k.生活環境への援助で、60.9%の学生が十分な介護でなかったことを認めている。
- ③指導者の評価より学生の評価のほうが高かった項目はg.食事の援助で、援助技術としては最も得意な領域であるが、34.1%は指導者の評価のほうが低かった。次いでd.利用者への対応で、利用者を尊重しコミュニケーションによる良好な関係づくりに努力したようであるが、31.7%は学生より評価が低かった。
- ④個別の学生の状況では、ひかえめで自信のない学生と謙虚な学生が施設指導者の評価より低い評価をする傾向にあった。逆に問題はあるが「できる」と自信過剰な学生、自己過大評価する傾向の学生は施設指導者の評価より高い評価をしていた。また、学習がきちんとされ、真面目でやさしい態度の学生、実習施設の学生受入れが良好で、安定した実習が出来た学生、不可が目立たない学生は施設指導者の評価と学生の評価が一致する傾向にあった。

8. 考察とまとめ

1. 巡回実習指導

実習中における学生への指導は、教員が各施設に巡回して学生や施設指導者と面接して学習上の問題を把握して行っている。巡回指導は、実習目標にそって学習がされているか、利用者の観察、状態にあわせた援助がされているか、介護の現場で落ち着いて実習がされているか等について話し合うとともに、実習記録が適切に書かれているか確認している。

巡回記録に記載された学生の実習上の問題は、実習指導者と調整しあるいは学内での指導の材料となる。実習中の学生の様子は、実習開始2-3日は何をしてよいか判らず不安で立ちつくしていることが多い。指導者のアドバイスで少しずつ慣れてくるが、初めて高齢者の方と何を話してよいか戸惑うことが多い。世代の離れた高齢者とどんな話題で、どんな言葉使いで接するのか不安になる。指導者も忙しそうに聞くことも出来ないなど学ぶ意欲を自ら阻害してしまうことも多い。時間と共に慣れてきて、あるいは利用者のやさしい言葉に助けられ、逆に励まされて安定してくる。

しかし、施設の指導者からは実習に対する学習不足、レディネスや基本的な介護技術の不十分さが指摘されている。

教員も学生の実習への取り組みや実習体験の活かし方、実習目標の達成状況を見ながら

個々の学生の特質を活かせるようにアドバイスを行うが、実習巡回指導記録用紙の活用によって学生の問題や進捗の確認が有効となる。

2. 実習評価

実習は介護福祉士の資格を与える上で重要な科目であり、的確な評価を必要とする。介護は単なる技術援助でなく、援助を必要とする人の安全・安楽な生活のために人の温かい関わりを通して行われる全人的ケアである。しかし、現場の実習は学内と異なり利用者の生活の場であり職員の働く場である。その中で学習させていただくのであるから厳しいのは当然である。

実習評価は、教員が直接介護実習の現場にあって学生を指導することが出来ない状況の中で行われるので、施設指導者の評価が大きなウェイトを占める。実習施設は40以上の施設に依頼して行われるので、評価のばらつきがあるのは否定できない。そこで、可能な限り多くの情報から学生を客観的にとらえて評価する必要がある。

今回、学生が自己の実習の成果をどのようにとらえているのか、施設指導者と同じ評価表を用いて自己評価を行うとともに、「実習Ⅰのまとめ」用紙を用いて反省をおこなった。

(1) 施設指導者の評価と学生の評価

学生自身の評価は、全体として施設指導者の評価より厳しいものであった。それは、学習不足の自己反省も含めてのことである。さらに、次回の実習での課題を持つことによって学習の動機づけとしている。個々の学生で見ると、できない自分を認めたくないために自己評価が甘い、あるいは自信のなさが極端にマイナス点をつけてしまうこともある。

単位認定者である教員は、個々の学生の特徴をとらえながら、学習課題を与えて励ましたり努力を認めたりしながら複数の教員で評価する。教員の評価は単に点数をつけるのではなく、今後の指導課題と認識している。

(2) 「実習Ⅰのまとめ」用紙を用いての反省

オリエンテーションに関しては実習の事前学習も含めて把握状態は良好であった。利用者の生活の現場を見ながら、利用者と接しながら具体的な把握となっている。

基礎的学習・介護技術に関しては、初めての実習でもあり自信のなさや利用者への迷惑を考えてなかなか手が出ない状況であるが、その中から学んだことは、個別性の理解、対象の状況に合わせた応用技術であった。このことは現場でなければ学べないことである。

学生が最も苦手とすることは「記録」と「言葉使い」への配慮であった。書くことが苦手、漢字を知らないということだけでなく、プライバシーの問題、利用者への配慮など緊張感の中で与えられた課題を達成することの難しさである。しかし、実習終了後の成長は著しいものがある。報告会などでの資料づくり、発表態度などは実習前と比して格段の違いが出てくることから言える。

3. まとめ

実習指導の新たな取り組みから、実習巡回指導と実習評価について考察を試みた。それ

は、介護福祉専攻の学生は社会福祉士の国家試験の受験資格も同時に取得することをめざして学習しているので、学部全体の共通目標を加えたことである。

「実習の手引き」も作り直し、巡回指導のありかたや実習評価について従来の反省をふまえて実施する仕組みをつくった。今回は実習Ⅰをとりあげたが、実習Ⅱ、実習Ⅲにつなげて学生指導のありかたを検討していきたい。

参考文献

- 1) 山手茂著「社会福祉専門職と社会サービス」相川書房，2003.
- 2) 古川孝順他編集「介護福祉」有斐閣，1999.
- 3) 岡本千秋編集「介護福祉実習指導」メヂカルフレンド社，平成11.
- 4) 泉順編著「介護実習への挑戦」ミネルヴァ書房，2000.
- 5) 佐藤沙織他「介護福祉実習における介護ニーズの捉え方の分析」第11回日本介護福祉学会，2003.
- 6) 尾台安子他「介護福祉実習に対する学生の意識と課題」介護福祉教育 NO.18，2004，july.